

第 411 回
日本泌尿器科学会新潟地方会
《 プログラム・抄録 》

日 時：令和 6 年 12 月 14 日（土）15 時 25 分
会 場：新潟グランドホテル 3 階『悠久の間』
新潟市中央区下大川前通 3 ノ町 2230 番地
TEL：025-228-6111

次回 第 412 回 新潟地方会 予告
日時：令和 7 年 3 月 8 日（土）午後 3 時
会場：未定
演題申込期限：令和 7 年 2 月 14 日（金曜日）

※すべて PC のみの発表とさせていただきます
Macintosh の先生はコンピューターをご持参ください。
※一般口演時間は、7 分、討論 3 分（時間厳守）

日本泌尿器科学会会員証を必ずご持参下さい

〒951-8510 新潟市中央区旭町通 1-757
新潟大学大学院腎泌尿器病態学分野(泌尿器科学教室)内
日本泌尿器科学会新潟地方会
TEL：025 (227) 2289/FAX：025 (227) 0784
会長 富田 善彦

15:25~15:30

開会の辞

日本泌尿器科学会新潟地方会会長

富田善彦

15:30~16:30

座長 渡邊和博

1. 左結石性腎盂腎炎治療後に増悪した重症尿路真菌感染症の経験

新潟大学地域医療教育センター魚沼基幹病院 泌尿器科¹⁾、総合診療科²⁾、放射線診断科³⁾
西山紘貴¹⁾、田中純太²⁾、石田恭平¹⁾、池田洋平³⁾、原昇¹⁾、西山勉¹⁾

糖尿病加療中の38歳男性が左結石性腎盂腎炎でER受診し、左尿管ステントを留置し軽快した。10日後に再度発熱し、ER受診した。左腎盂腎炎再燃の診断で入院加療を行うも、症状改善がえられず、その2週間後のCTで左気腫性腎盂腎炎を認め、尿培養の結果カンジダを認めた。ドレナージ不良を疑い、左尿管ステントを2本留置し、フルコナゾールの内服を開始した。その後徐々に症状の改善が得られ、2本の左尿管ステントを抜去した。左尿管結石はステント抜去と同時に膀胱内に排石した。

2. 当院で経験した尿管坐骨孔ヘルニアの2例

柏崎総合医療センター 泌尿器科
有波健太郎、若杉優樹、羽入修吾

尿管坐骨孔ヘルニアはこれまでに文献的報告が40例程度と非常に稀な疾患である。当院で経験した2例について、文献的考察も加えて報告する。【症例1】78歳女性。排便困難でトイレで気張った後、左腹痛・臀部痛が出現。CT:左尿管坐骨孔ヘルニア、水腎症～尿溢流。腰椎麻酔下のGW操作で自然整復、DJカテーテル留置。後日外来抜去、以降再燃なく経過。【症例2】95歳女性。右坐骨孔ヘルニア、閉塞性腎盂腎炎にて右腎瘻増設。以降腎瘻管理継続中。

3. 脳死下献腎移植、心停止下献腎移植、生体腎移植の比較検討

新潟大学大学院 医歯学総合研究科 腎泌尿器病態学分野
佐波達朗、晝間楓、石川晶子、池田正博、安樂力、田崎正行、齋藤和英、富田善彦

改正臓器移植法が施行されて以降、臓器提供は心停止下から脳死下の提供にシフトしてきている。これまで、移植腎生着率は生体腎移植の方が死体腎移植よりも有意に良好な成績であったが、死体腎移植を心停止下提供と脳死下提供で区別して比較する報告は少ない。当院で2011年～2023年に行った腎移植のうち、ABO血液型不適合腎移植、既存抗体陽性腎移植を除いた213名を対象に、心停止下献腎移植、脳死下献腎移植、生体腎移植の3群で比較検討した。文献的考察を踏まえて報告する。

4. 当院における膀胱水圧拡張術症例の検討

新潟県立中央病院 泌尿器科
若杉優樹、石田恭平、村田雅樹、片桐明善

当院において2011年4月から2024年9月までに19症例に施行した33件の膀胱水圧拡張術について後方視的に調査した。初回手術時の年齢の中央値は65歳で男性が6例、女性が13例、ハンナ潰瘍を認めたのは9例であった。疼痛が改善したのは初回手術のみで73%、2回目以降も含めると60%であった。頻尿が改善したのは初回手術のみで66%、2回目以降も含めると65%であった。効果はあるが術後約6か月で症状が再燃する傾向であった。上記につき文献的考察も交えて報告する。

5. 陰部から発症した『人食いバクテリア』の1例

新潟大学大学院 医歯学総合研究科 腎泌尿器病態学分野

晝間楓、星野華奈、佐波達朗、池田正博、安樂力、田崎正行、齋藤和英、富田善彦

37歳男性が陰嚢腫脹を伴う発熱のため救急搬送され、フルニエ壊疽による敗血症性ショックとして当科へコンサルトされた。糖尿病の既往は無く、CT画像上の皮下ガス産生像もないことから保存的に抗生剤治療を開始した。陰嚢皮膚は数日以内に潰瘍調となり、血液培養からA群溶血性レンサ球菌が検出されたことから劇症型溶血性レンサ球菌感染症と診断した。デブリドマンが施行され、局所および全身状態は改善した。陰嚢から発生した稀な劇症型溶血性レンサ球菌感染症を報告する。

6. 高齢男性における巨大尿膜管癌の1例

新潟市民病院 泌尿器科

結城恵里、池田多朗、笠原隆、川上芳明、今井智之

80歳男性。摂食困難と腹部膨隆を主訴に当院消化器内科を受診し、CTで腹部の巨大腫瘍を指摘された。尿膜管由来腫瘍が疑われたため、当科へ紹介となり、腫瘍摘出術を施行した。手術は長時間を要したが、腫瘍の摘出には成功した。しかし、術後に小腸穿孔と腹腔内膿瘍が発生し、開腹ドレナージおよび小腸部分切除術が必要となった。術後の回復には時間を要したものの、徐々に改善が見られた。本症例の治療経過とその考察を報告する。

《 休 憩 16:30~16:45 》

16:45~17:15

新潟泌尿器科同窓会総会

